

6. 日・韓両国の更年期婦人における症状とその自己管理法及び性生活の様相に関する研究

看護学専攻 中尾 優子, 荒木 美幸, 山崎真紀子

宮原 春美, 大石 和代, 中島 久良

晋州保健大学 宋 愛理

<研究目的>

更年期女性の症状と自己対処法および、性生活に関する実態調査を日本・韓国の両国で行い、両国に共通する項目並びに社会的・文化的影響を受ける項目を明らかにして、新たな更年期スケールの開発にアプローチする。

<研究の背景>

わが国では現在、第1次ベビーブームの世代が、更年期を経緯しており、また20年後には第2次ベビーブームの世代が更年期に突入する。ところで、今日における平均寿命の延長は、50歳以降の非生殖期間すなわち更年期と老年期の延長に起因しており、わが国でも先進諸国同様に今後は多数の更年期女性を抱える状況が十二分に想定される。健全な国際社会の確立を図る上では、更年期女性の健康管理も重要な課題の一つといえる。

<研究の意義>

更年期の不定愁訴発症に関わる因子は、内分泌学的因子、心理的・性格的因子、社会的・文化的因子の3つに大別されるが、ここ数年間エストロゲン低下に着目したホルモン補充療法に関する内分泌学的研究が主流となっている。心理的・性格的因子あるいは社会的・文化的因子を含めた看護学・保健学的アプローチは非常に少なく、更年期女性のQOL向上に寄与する研究は十分とはいえない。したがって更年期に関与する社会的・文化的因子の影響を明らかにし、その異文化間（日本と韓国）の差異を考慮した学際的な更年期スケールモデルを開発・設定することは意義あるものと考えられる。さらに、その新しい更年期スケールに基づく実態調査の解析成績を更年期女性の詳細な健康支援に反映させ、更年期女性のQOLの向上に寄与することの医学的および社会的意義は多大である。

<関連領域の探索>

更年期症状の客観的評価スケールとして最初に用いられたのは、1950年代のニューヨークでの臨床経験から抽出されたクッパーマン指数である。これは全世界で汎用されてきた。わが国では、この更年期指数や簡略更年期指数(SMI)が使用されていたが、前者は日本人には必ずしも適合せず、また後者は簡便ではあるが、多岐にわたる不定愁訴を網羅しきれないとの理由等により、慶応式中老年健康維持外来調査票が普及している。そのほか、精神因子・心理的因子の関与や神経症やうつ病との鑑別を主目的としたCMI健康調査表や自己うつ評定法(SDS)も利用されている。今後は、更年期症状とその自己管理法および心理的因子の関連性に配慮した新しい更年期スケールの開発が望まれる。

<研究方法>

研究期間：2003年1月～2005年3月

研究スケジュール：

I. 質的調査

文献調査

面接調査

1) 7～10名を対象に面接法による聞き取り調査の実施(韓国・日本)

2) 質問紙No1作成

II. 量的調査

1) 質問紙No1；50名を対象に質問紙調査実施(韓国・日本)

2) 解析；解析結果をもとに日韓会議開催(会議メンバー 4看護専門職 2婦人科医師)し、質問紙No2完成

3) 質問紙No2；50名を対象に質問紙調査実施

4) 2週間後に同上対象で質問紙再調査

5) 解析；解析結果をもとに日韓会議開催(会議メンバー 4看護専門職 2婦人科医師)し、質問紙No3完成

6) 質問紙No3；対象1,000名以上の規模で調査展開

従来の更年期評価スケールも同時に調査(対象とする)(韓国・日本)

7) 調査解析；解析結果をもとに日韓会議

新たな更年期スケールの設定

倫理的配慮；調査に当たっては研究の主旨及び守秘義務等の倫理的配慮を明示した書類を提示し、研究の協力をお願いする。研究対象は同意の得られたものだけとする。

<現在までの経過>

研究スケジュール I の 2) 質問紙 No 1 作成の検討中